記　録

文書番号	ＳＣＪ第２５期 050915-25900000-018
委員会等名	日本学術会議パンデミックと社会に関する連絡会議
標題	「パンデミックと社会に関する連絡会議」の 25 期の活動総括と課題について
作成日	令和５年（２０２３年）９月１５日

※　本資料は、日本学術会議会則第二条に定める意思の表出ではない。掲載されたデータ等には、確認を要するものが含まれる可能性がある。

この記録は、日本学術会議パンデミックと社会に関する連絡会議の審議結果を踏まえ、日本学術会議幹事会の承認をえて公表し、次期における審議の礎とするものである。

日本学術会議パンデミックと社会に関する連絡会議コアメンバー

世話人	望月　眞弓	（第二部会員）	日本学術会議副会長・慶應義塾大学名誉教授
副世話人	武田　洋幸	（第二部会員）	日本学術会議第二部長・京都産業大学生命科学部教授
	秋葉　澄伯	（連携会員）	弘前大学特任教授
	磯　博康	（第二部会員）	国立研究開発法人国立国際医療研究センター国際医療協力局グローバルヘルス政策研究センター長
	尾崎　紀夫	（第二部会員）	名古屋大学大学院医学系研究科教授
	神田　玲子	（第二部会員）	国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構量子生命・医学部門放射線医学研究所所長
	北川　尚美	（第三部会員）	東北大学大学院工学研究科研究科長補佐／教授
	高倉　弘喜	（連携会員（特任））	大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立情報学研究所教授
	丹下　健	（第二部会員）	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
	名越　澄子	（第二部会員）	埼玉医科大学総合医療センター消化器・肝臓内科教授
	東野　輝夫	（連携会員）	京都橘大学副学長／工学部教授
	日比谷　潤子	（第一部会員）	学校法人聖心女子学院常務理事
	前川　知樹	（連携会員）	新潟大学医歯学総合研究科高度口腔機能教育研究センター研究教授
	山川　みやえ	（連携会員）	大阪大学大学院医学系研究科統合保健看護科学分野老年看護学准教授
	和氣　純子	（第一部会員）	東京都立大学大学院人文科学研究科教授

本連絡会議には以下の分科会が参加した。

第一部	哲学委員会　哲学・倫理・宗教教育分科会
第一部	心理学・教育学委員会　排除・包摂と教育分科会
第一部	心理学・教育学委員会　高大接続を考える分科会
第一部	心理学・教育学委員会　乳幼児発達・保育分科会
第一部	社会学委員会　社会福祉学分科会
第一部	社会学委員会・経済学委員会合同　包摂的社会政策に関する多角的検討分科会
第一部	社会学委員会　社会統計調査アーカイヴ分科会
第一部	社会学委員会　災害・復興知の再審と社会的モニタリングの方法検討分科会
第一部	社会学委員会　社会理論分科会
第一部	社会学委員会　ジェンダー研究分科会

第一部　　社会学委員会　新しい社会的課題の解決に関する総合的検討分科会

第一部　　史学委員会　科学・技術の歴史的論理的社会的検討分科会

第一部　　史学委員会・言語・文学委員会・哲学委員会・地域研究委員会合同　アジア研究・対アジア関係に関する分科会

第一部　　史学委員会　歴史資料の保存・管理と公開に関する分科会

第一部　　史学委員会　歴史認識・歴史教育に関する分科会

第一部　　地域研究委員会　人文・経済地理学分科会

第一部　　地域研究委員会　地域学分科会

第一部　　地域研究委員会　文化人類学分科会

第一部　　法学委員会　ＩＴ社会と法分科会

第一部　　法学委員会　セーフティネットと法分科会

第一部　　政治学委員会　国際政治分科会

第一部　　政治学委員会　政治過程分科会

第一部　　経済学委員会　持続的発展のための制度設計分科会

第一部　　経営学委員会　新型コロナ感染症による経営実践・経営学・経営学教育への影響を検討する分科会

第二部　　第二部大規模感染症予防・制圧体制検討分科会

第二部　　基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同　生物物理学分科会

第二部　　基礎生物学委員会・基礎医学委員会・臨床医学委員会・心理学・教育学委員会合同　生物リズム分科会

第二部　　統合生物学委員会・基礎生物学委員会・農学委員会・基礎医学委員会・臨床医学委員会合同　総合微生物科学分科会

第二部　　基礎医学委員会　免疫学分科会

第二部　　臨床医学委員会　出生・発達分科会

第二部　　臨床医学委員会　臨床研究分科会

第二部　　臨床医学委員会　脳とこころ分科会

第二部　　臨床医学委員会　老化分科会

第二部　　健康・生活科学委員会・基礎医学委員会合同　パブリックヘルス科学分科会

第二部　　健康・生活科学委員会　看護学分科会

第二部　　健康・生活科学委員会　高齢者の健康分科会

第二部　　健康・生活科学委員会・臨床医学委員会合同　少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会

第二部　　歯学委員会　基礎系歯学分科会

第二部　　歯学委員会　病態系歯学分科会

第二部　　歯学委員会　臨床系歯学分科会

第二部　　薬学委員会　医療系薬学分科会

第二部　　薬学委員会　地域共生社会における薬剤師職能分科会

第三部　　数理科学委員会　数学分科会

第三部　　地球惑星科学委員会　ＩＧＵ分科会

第三部　　情報学委員会　環境知能分科会

第三部　　化学委員会　分析化学分科会

第三部　　総合工学委員会　総合工学企画分科会

第三部　　土木工学・建築学委員会　感染症拡大に学ぶ建築・地域・都市のあり方分科会

本記録の作成にあたり、以下の職員が事務を担当した。

事務　　佐々木　亨　参事官（審議第二担当）

　　若尾　公章　参事官（審議第一担当）付参事官補佐

調査　　穴山　朝子　上席学術調査員

目　次

１　連絡会議設置の背景と経緯 1
２　25 期の連絡会議の活動. 1
３　第 25 期の活動と今後に向けての課題に関するアンケート調査. 2
４　第 26 期への引継ぎ 3
≪参考≫記録の作成経過 5
＜資料１＞パンデミックと社会に関する連絡会議コアメンバー名簿. 6
＜資料２＞パンデミックと社会に関する連絡会議会議開催実績. 7
＜資料３＞第１回パンデミックと社会に関する連絡会議資料. 8
＜資料４＞アンケート調査結果 15

「パンデミックと社会に関する連絡会議」の 25 期の活動総括と課題について

１．連絡会議設置の背景と経緯

日本学術会議（以下、日学）では第 24 期の最終年から新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）に関して取り組んできた。その後、緊急性が高く重要度も高い課題に分野横断的で機動的に動ける組織が必要となり、2021 年１月に幹事会のもとに「コロナ禍対応ワーキンググループ（以下、コロナ対応 WG）」を設置した。メンバーは担当副会長１名、各部（うち１名は部役員）、大規模感染症予防・制圧体制検討分科会より全 12 名で構成し世話人は武田洋幸第二部部長が務めた。

コロナ対応 WG では、大規模感染症、特に COVID-19 に関する課題の抽出、日学内の審議の連携、適切な情報発信、学術フォーラム・シンポジウム企画、関連する学協会との連携、国際活動などに関する事項を検討してきた。具体的な活動として、246 分科会へのアンケートを行い 40 前後の分科会が COVID-19 に関連する審議、情報発信を実施・予定であることを明らかにした。

このようにコロナ対応 WG は COVID-19 への緊急的な対応などで十分にその機能を果たしてきた。今後は中長期的な視点で分野横断的な議論を深めることも必要になると考え、「パンデミックと社会に関する連絡会議（以下、連絡会議）」の設置をコロナ対応 WG の武田第二部部長より 2021 年７月幹事会懇談会に提案し承認を受けた。日学には、学術の諸科学の専門知により、COVID-19 に対する社会と学術のあり方について、学術的観点から横断的に審議し、その成果を発信していくことが期待されている。このことから連絡会議は、第一部、第二部、第三部の全ての分野において COVID-19 に関連した審議を行っている委員会・分科会（以下、分科会等）で構成し、それぞれの代表が連絡会議に出席することとした。これに伴いコロナ対応 WG は発展的に解散した。連絡会議は世話人を望月眞弓副会長、世話人補佐を武田洋幸第二部部長が務めることとし、関係する各部の幹事等、計 15 名の委員をコアメンバー（資料１：コアメンバー名簿）と定めて活動を開始した。

２．25 期の連絡会議の活動（資料２：会議開催実績）

連絡会議では、緊急時のみならず平時における社会や学術の問題点も点検・議論し、次のパンデミックに耐えられるレジリエントな社会の実現に向けての議論を展開することとし、学術の諸科学の専門知を効果的に連携し、総合的、俯瞰的な検討を図ることを目的とした。

連絡会議の活動開始に当たり、参加希望アンケート調査を実施した（2021 年９～10 月）。アンケートでは連絡会議が扱うテーマとして、①平時および緊急時の臨床研究のあり方、②With/ Post コロナの社会変革の２テーマを軸に、分科会等から、テーマへの関心の有無、予定している議論や意思の表出、学術フォーラム・シンポジウム企画などを調査し、類似あるいは共通性のあるテーマで整理・グルーピングし参加分科会等を 10 のワーキンググループに振り分けた（資料３：第１回連絡会議資料）。

第１回連絡会議（2021 年 12 月１日開催）では参加希望分科会等より代表の出席を受け、アンケートで収集された分科会等のテーマの内容および 10 の WG について説明し、分科会間の情報共有を図るとともに意見交換を行った。また、第 183 回総会（2021 年 12 月２～３日開催）において、連絡会議の設置の経緯、目的、活動方針などを説明し討議した（説明内容は資料３参照）。

連絡会議の活動はコアメンバー会議を中心に行い、各 WG にはコアメンバーから２～３名が世話人として指名された。コアメンバー会議は通算８回開催し、主に各 WG の活動状況の共有、分科会間の連絡を図る、学術フォーラム・公開シンポジウムの企画、Ｇサイエンスなど国際会議への協力メンバーの推薦などを行なった。

WG のうち最初に活動を開始したのは、「平時、緊急時の臨床、疫学、基礎研究の体制」WG（構成分科会数 13）である。この WG では「将来的なパンデミックに備えた平時からの体制作り」という観点に立ち、「臨床研究」、「疫学研究」、「基礎研究」をキーワードに意見交換を重ねつつ、これらに該当する産学の専門家からヒアリングも併せて実施した。結果、先行している欧米諸国に比して、新型コロナウイルス感染症のパンデミックへの対処に関して進んでいる面があるものの、大きく後れを取っている面や今後の課題が明らかとなった。これらの課題等について「報告」を発出するにあたり、連絡会議としては発出母体になれないことが明らかとなった。このため、WG の幹事が所属する３つの分科会（統合生物学委員会・基礎生物学委員会・農学委員会・基礎医学委員会・臨床医学委員会合同総合微生物科学分科会、臨床医学委員会臨床研究分科会、健康・生活科学委員会・基礎医学委員会合同パブリックヘルス科学分科会）が発出母体となり、「報告：感染症パンデミックに対するわが国の平時・緊急時の臨床・疫学・基礎研究の現状と課題」を公表した（2023 年６月 16 日）。また、社会変革に関わる「格差（経済、情報、健康、ジェンダー）」「社会システム（福祉、医療、防災、環境、建物、まちづくり）」、「教育のデジタル化（含 誘発される諸問題）」、「コミュニケーション・孤立」、「ケア(健康、メンタルヘルス、介護予防)」などの各 WG では活動状況に関するアンケートを実施し回答をとりまとめた。その他 WG では WG 内での情報共有などを世話人が中心となって行なってきた。

なお、WG が直接関わらない形でも各分科会が意思の表出を行っており、それらについては資料４に記載した。

連絡会議や連絡会議に参加している分科会等が中心となり COVID-19 やパンデミックなどをテーマに学術フォーラム・公開シンポジウムを数多く開催した（資料４）。特に学術フォーラム「コロナ禍を共に生きる」は、シリーズとして８回開催した。また、学術の動向には学術フォーラムや公開シンポジウムを基に計６回の COVID-19 に関連する特集が組まれた。

３．第 25 期の活動と今後に向けての課題に関するアンケート調査（資料４）

第 25 期の活動状況は、連絡会議の活動に参加した 45 分科会の会議開催数は２～12 回と幅広く分布し、最も多かった分科会は 12 回であった。意思の表出については、提言１

分科会、見解５分科会、報告４分科会となっていた。公開シンポジウム・学術フォーラムについては約６割の分科会が開催していた。なお、意思の表出、公開シンポジウム・学術フォーラムの開催などの詳細は資料４を参照されたい。

アンケートでは、各分科会に対し「パンデミックの連絡会議を通じて得られた成果等」「第 26 期に連絡会議は必要か」「連絡会議に期待していたこと」「第 26 期に必要と思われる連絡会議のテーマ等」について自由回答で意見を求めた。これらについては資料４に詳述した。また、第４項「26 期への引き継ぎ」は寄せられた主な意見を反映して記載した。

４．第 26 期への引継ぎ

第 26 期の連絡会議の必要性については、約 6 割が「必要あり」と回答し、「必要なし」は４分の１に留まった。２つの分科会から WHO がコロナパンデミックの緊急事態終了が宣言されたので継続は必要ないのではという意見もあったが、コアメンバー会議は、今後起こり得る健康危機に対して平時から長期的、恒常的な検討が必要であると考えている。パンデミックの経験からあぶり出されたものを取りまとめて、対応策も含めて後世に残すことが重要であり、連絡会議は何らかの形で継続されることが望まれる。

連絡会議は第一部、第二部、第三部の全ての分野から分科会等が参画し、異なる領域、異なる分野間の情報共有や意見交換の場として機能することを期待されていた。連絡会議の成果として有益な情報交換ができたことを挙げた分科会もあったが、十分であったとは言い難い。連絡会議自体は規模が大きく頻繁に開催することは難しい。そのため、共通するテーマの WG を設置したことは有効であったと考えている。WG では、世話人が中心となり定期的に分科会等の活動状況を WG 内で共有するとともに、各世話人がコアメンバー会議でその報告をする形で連絡会議全体として情報共有を図った。一方で、この機能が十分発揮できた WG とそうでない WG が存在したのも事実である。WG の全体数や一人の世話人が担当する WG の数に課題もあったと考える。その解決には、連絡会議で検討された課題を整理し、優先順位をつけて WG を設置し検討を進めるなどの工夫が必要であろう。

WG での議論が進み意思の表出をする段階で、連絡会議では意思の表出ができないことが明らかになり、WG に参加した複数の分科会が共同で意思の表出をするという形を取らざるを得なかった。その結果、複数の分科会が関わるため取りまとめが複雑化し時間を要することとなった。今後は、現行の連絡会議が意思の表出の発出主体となることも一つの方法である。一方で連絡会議は規模が大き過ぎて十分な議論を尽くせるかには疑問もある。連絡会議を通じて抽出されたテーマ毎に関心のある会員や連携会員の参加を募り、意思の表出が可能な委員会または分科会を組織することも一案である。その場合は連絡会議が委員会または分科会を設置できるよう規則の改正が必要になろう。このような会議体が設置されれば意思の表出のための分野横断的な審議を深化させることが可能になると考えられる。

このほか、国際会議対応の日本の受け皿としての組織が必要との意見もあった。実際、2022 年の ISC（国際学術会議）について国際委員会から連絡会議に相談があり、委員を推

薦した。このような役割も連絡会議に必要と考える。学術フォーラムや公開シンポジウムの企画段階での関わり方も課題である。これらの申請様式には関係する会議体を記載する項目があり、幹事会提案の前に連絡会議に情報が入れば、助言をすることが可能となっているが、内容が固まった段階で報告のみになっている事例もあり、改善が必要である。パンデミックに関連する課題を検討する委員会・分科会の設置に際して、それらの委員の構成に関して助言・支援する役割についても期待されていたが、今期は連絡会議の設置自体が２年目に入ってからであったことから対応ができていない。次期での検討課題である。

≪参考≫記録の作成経過

【令和５年】

４月 10 日　　パンデミックと社会に関する連絡会議コアメンバー会議（第８回）
　　・連絡会議参加分科会へのアンケート実施を決定

５月　２日　　連絡会議参加分科会へのアンケートを発出（回答締切：５月 22 日）

６月　６日　　アンケート回答を集計。回答内容分析開始。

８月 22 日　　パンデミックと社会に関する連絡会議コアメンバー会議（第９回）
　　・アンケート結果の確認、記録案の審議

８月 29 日
　～９月５日　コアメンバー間における記録案調整

９月　６日
　～９月 11 日 連絡会議参加分科会委員長による記録案審議

９月 15 日　　第３５３回幹事会にて記録公表を承認

パンデミックと社会に関する連絡会議コアメンバー

資料１

	氏名	ふりがな	職名	備考
	日比谷　潤子	ひびや　じゅんこ	学校法人聖心女子学院常務理事	第一部副部長
	和氣　純子	わけ　じゅんこ	東京都立大学大学院人文科学研究科教授	第一部会員
	磯　博康	いそ　ひろやす	国立研究開発法人国立国際医療研究センター国際医療協力局グローバルヘルス政策研究センター長	第二部会員
	尾崎　紀夫	おざき　のりお	名古屋大学大学院医学系研究科教授	第二部幹事
	神田　玲子	かんだ　れいこ	国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構量子生命・医学部門放射線医学研究所所長	第二部幹事
世話人補佐	武田　洋幸	たけだ　ひろゆき	京都産業大学生命科学部教授	第二部長
	丹下　健	たんげ　たけし	東京大学大学院農学生命科学研究科教授	第二部副部長
	名越　澄子	なごし　すみこ	埼玉医科大学総合医療センター消化器・肝臓内科教授	第二部会員
世話人	望月　眞弓	もちづき　まゆみ	慶應義塾大学名誉教授	副会長 第二部会員
	北川　尚美	きたかわ　なおみ	東北大学大学院工学研究科研究科長補佐／教授	第三部幹事
	秋葉　澄伯	あきば　すみのり	弘前大学特任教授	連携会員 第二部大規模感染症予防・制圧体制検討分科会委員長
	高倉　弘喜	たかくら　ひろき	大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立情報学研究所教授	特任連携会員 第二部大規模感染症予防・制圧体制検討分科会
	東野　輝夫	ひがしの　てるお	京都橘大学副学長／工学部教授	連携会員
	前川　知樹	まえかわ　ともき	新潟大学医歯学総合研究科高度口腔機能教育研究センター研究教授	連携会員 若手アカデミー
	山川　みやえ	やまかわ　みやえ	大阪大学大学院医学系研究科統合保健看護科学分野老年看護学准教授	連携会員 若手アカデミー

資料２

パンデミックと社会に関する連絡会議　開催状況

○パンデミックと社会に関する連絡会議
・第１回：令和３年 12 月　１日

○パンデミックと社会に関する連絡会議コアメンバー会議
・第１回：令和３年　８月 16 日
・第２回：令和３年　９月 14 日
・第３回：令和３年 10 月 21 日
・第４回：令和３年 11 月 24 日
・第５回：令和４年　４月　７日
・第６回：令和４年　９月　１日
・第７回：令和４年　９月 29 日
・第８回：令和５年　４月 10 日
・第９回：令和５年　８月 22 日

○平時および緊急時の臨床、疫学、基礎研究の体制ワーキンググループ
・第１回：令和３年 12 月 29 日
・第２回：令和４年　２月　９日

○平時および緊急時の臨床、疫学、基礎研究の体制ワーキンググループ
コアメンバーミーティング
・第１回：令和３年 12 月　６日
・第２回：令和３年 12 月 15 日
・第３回：令和４年　１月 19 日
・第４回：令和４年　５月 16 日
・第５回：令和４年　６月 30 日

○コミュニケーション・孤立ワーキンググループ
・第１回：令和４年　６月　２日

○専門家ヒアリング
・第１回：令和４年　３月　１日
・第２回：令和４年　３月 16 日
・第３回：令和４年　３月 23 日
・第４回：令和４年　３月 30 日

資料３

日本学術会議
パンデミックと社会に関する連絡会議

2021年12月

「パンデミックと社会に関する連絡会議」の設置の背景と趣旨

COVID－19を巡る状況

- ワクチン接種が進む中、感染克服に期待が集まっているが、未だに終息の目処は立っていない
- 一方で、COVID-19の世界的流行は、現代社会が内包する問題点とポテンシャルを顕在化
- 特に、我が国においては、社会、学術の様々な問題点が露呈

日本学術会議では、多くの委員会、分科会がCOVID－19に関して議論し、情報発信してきた

- 大規模感染症予防・制圧体制検討分科会の設置(2020年2月)
- 緊急課題を集中して検討するためコロナ対応ワーキンググループを設置(2021年1月)
- 声明(2)、会長談話(1)、提言(2)、Gサイエンス共同声明(2)、サイエンス20共同声明(1)
- 日本学術会議内での審議状況の共有や情報発信の促進（学術フォーラムのシリーズ化、「学術の動向」特集号の企画、COVID-19特設ページに情報を集約等）を実施
- 学術フォーラム、公開シンポジウムなど2020年6月～2021年7月までに31回開催

学術の諸科学の専門知を効果的に連携し、総合的、俯瞰的な検討を進めることは日本学術会議の役割

- 現在のCOVID-19感染への対応に加えて、中長期的な視点でwith/postコロナにおける医療体制や社会の在り方について議論を深め、政府や社会に貢献する
- その際、人文・社会科学、生命科学、理学・工学の各分野の科学者による横断的な審議が必要
- 緊急時だけでなく平時における社会や学術の問題点を点検・議論し、パンデミックに耐えられるレジリエントな社会制度を構築するための検討が不可欠

COVID-19 に関連する審議等を行っている（関心を有する）委員会、分科会等の代表者からなる「連絡会議」を設置します

「連絡会議」の設置により、COVID-19に関連する委員会、分科会等の連絡を図り、効果的な審議と分野横断的な議論を促進します。現在のCOVID-19への対応の検討とともに「パンデミックに耐えられるレジリエントな社会」を視野に入れた議論も展開します。

◎連絡会議における当面の審議事項（案）

① 大規模感染症（パンデミック）、特に新型コロナウイルス感染症に関する課題抽出
② 抽出された課題についての部をまたぐ横断的審議の促進（審議体制の提案）
③ 学術会議からの適切な情報発信、シンポジウム企画、関連する学協会との連携、国際協力に関すること

◎審議課題の例

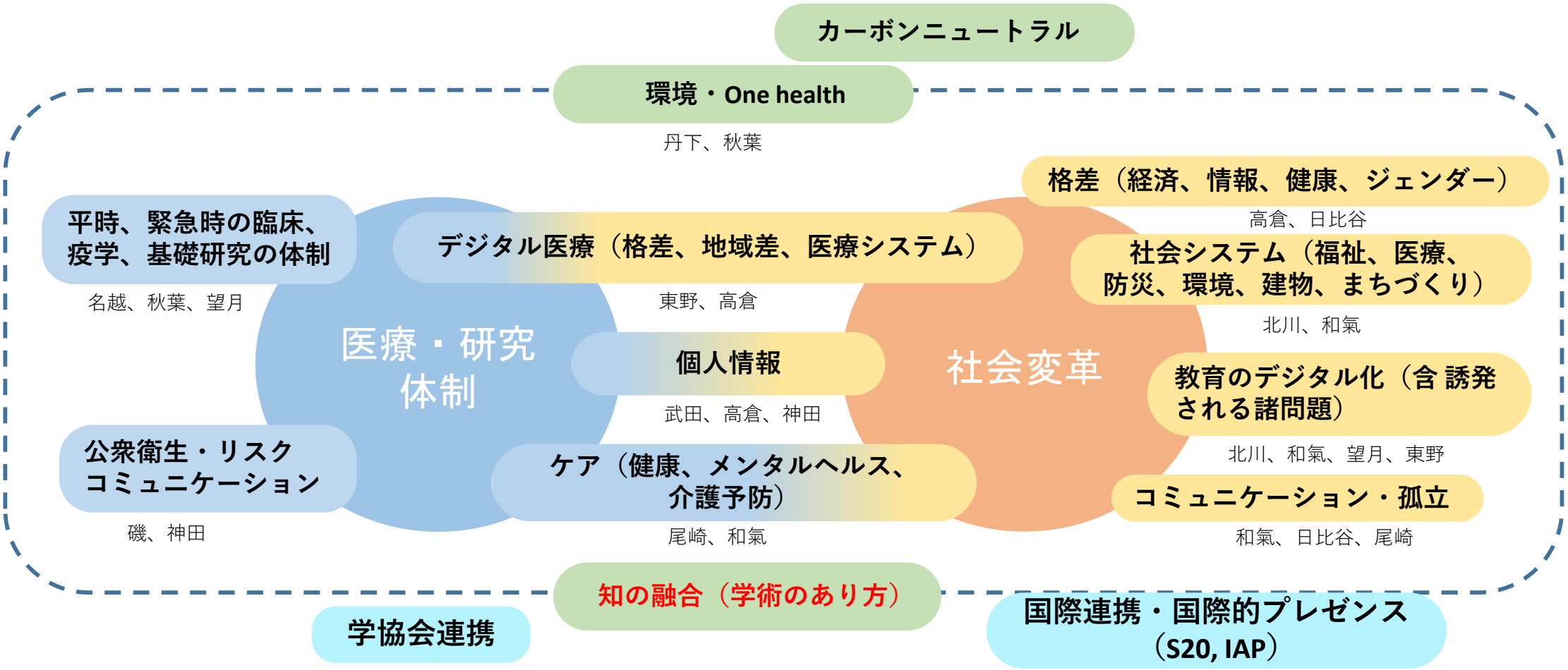
- 緊急時を含む臨床研究のあり方
- ワクチンを含む治療薬開発のあり方
- 緊急時を含む臨床データ収集のシステム
- デジタル医療
- コロナ禍で起こっている分断と格差

新型コロナウイルス感染症関連公開講演会についての情報（http://www.scj.go.jp/about_covid19.html）

COVID-19に関する公開講演会のリスト		
開催日	開催形式	タイトル
2020年6月3日	学術フォーラム	COVID-19とオープンサイエンス
2020年6月18日	学術フォーラム	人生におけるスポーツの価値と科学的エビデンス　新型コロナ感染収束後の社会のために
2020年7月16日	学術フォーラム	メディアが促す人と科学の調和―コロナ収束後の公共圏を考える―
2020年9月5日	公開ワークショップ	新型コロナウィルス禍の下での持続可能な発展のための教育の推進
2020年9月19日	公開シンポジウム	コロナ時代におけるフィールドワーク教育をめぐって
2020年9月20日	学術フォーラム	生きる意味　－コロナ収束後の産学連携が目指す価値の創造－
2020年10月3日	公開シンポジウム	複合災害への備え- withコロナ時代を生きる
2020年10月11日	公開シンポジウム	Withコロナの時代に考える人間の「ちがい」と差別　～人類学からの提言～
2020年11月7日	北海道地区会議主催 学術講演会	感染症との共存の現在と未来
2020年11月11日	学術フォーラム	コロナとの共生の時代における分析化学の果たす役割
2020年11月14日	公開シンポジウム	One health：新興・再興感染症～動物から人へ、生態系が産み出す感染症～
2020年11月20日	中部地区会議主催学術講演会	コロナ禍・豪雨災害：自然災害に向き合う
2020年11月25日	学術フォーラム	人口縮小と「いのちの再生産」―コロナ禍を超えて持続可能な幸福社会へ―
2020年11月28日	学術フォーラム	新型コロナウイルス感染症コントロールに向けての学術の取り組み
2020年11月29日	公開シンポジウム	COVID-19パンデミックを契機として考える日本の結晶学の現状と今後
2020年12月5日	公開シンポジウム	身体・社会・感染症―哲学・倫理学・宗教研究はパンデミックをどう考えるか―
2021年1月13日	公開シンポジウム	社会生活のデジタル改革
2021年3月17日	公開シンポジウム	新型コロナウイルス禍に学ぶ応用物理：未来社会に向けて
2021年3月21日	公開シンポジウム	新型コロナウイルスパンデミック下での食料問題に農芸化学分野が果たす役割
2021年3月24日	公開シンポジウム	コロナ禍が加速する持続可能な社会の実現に向けた地球環境変化の人間的側面研究の推進
2021年3月28日	公開シンポジウム	現代社会とアディクション
2021年3月29日	公開シンポジウム	ポストコロナの日本の畜産
2021年4月24日	公開シンポジウム	くすりのエキスパートが語る“よくわかる新型コロナウイルスワクチン”
2021年5月8日	学術フォーラム	コロナ禍を共に生きる[新型コロナウイルス感染症の最前線-what is known and unknown＃１]「新型コロナウイルスワクチンと感染メカニズム」
2021年5月23日	公開シンポジウム	With／Afterコロナ時代におけるケアの課題と新たな取り組み
2021年6月20日	公開シンポジウム	脳とこころから見たWith/Postコロナ時代のニューノーマルの課題と展望 1
2021年6月27日	公開シンポジウム	コロナ禍における社会福祉の課題と近未来への展望～直面する危機から考える～
2021年6月27日	公開シンポジウム	脳とこころから見たWith/Postコロナ時代のニューノーマルの課題と展望 2
2021年6月29日	公開講演会	新型コロナウィルス感染症対策の現状と今後-歯科からの発信-
2021年7月3日	公開シンポジウム	コロナ下において考えるべき栄養
2021年7月17日	公開シンポジウム	新型コロナワクチンを正しく知る
2021年8月28日	公開シンポジウム	ポストコロナ社会を見据えた睡眠・生活リズムのあり方～コロナ自粛から学ぶ～
2021年8月29日	公開シンポジウム	コロナ禍におけるトリアージの問題――世界の事例から日本を考察する
2021年9月11日	緊急学術フォーラム	「新型コロナウイルス感染症の災害級流行急拡大への対応」
2021年9月18日	学術フォーラム	コロナ禍を共に生きる[新型コロナウイルス感染症の最前線-what is known and unknown＃2]「新型コロナウイルス感染症の臨床的課題、対策と今後の方向性：臨床の現場を知り、何をすべきか一緒に考えましょう。」
2021年9月19日	公開シンポジウム	「コロナ禍における社会の分断：ジェンダー格差に着目して」
2021年9月22日	公開シンポジウム	海空宇宙のCOVID-19対応と今後のパンデミック対応に向けて
2021年9月25日	公開シンポジウム	With／Afterコロナ時代の看護とデジタルトランスフォーメーション
2021年10月23日	学術フォーラム	コロナ禍を共に生きる＃３「パンデミックに世界はどう立ち向かうのか～国際連携の必然性と可能性～」
2021年11月3日	北海道地区会議学術講演会	コロナ・ポストコロナ時代の社会課題の解決に向けて―記録・国際協力・情報技術―
2021年12月5日	公開シンポジウム	コロナ禍における人間の尊厳－危機に向き合って－」
2021年12月11日	公開シンポジウム	「With/After コロナ時代におけるケアの課題と新たな取り組み―子育てをしながら働き、働きながら暮らすための地域共生社会」
2021年12月23日	公開シンポジウム	プラスチックのガバナンス：感染症制御のための衛生環境管理と資源循環 (予定)

第25期日本学術会議　パンデミックと社会　活動俯瞰図

※　参画希望調査　2021年10月1日〆切
66分科会等からの計54件の提案を分類・整理



（世話人）

『パンデミックと社会』テーマ　小テーマ　委員会・分科会（仮）

※66分科会等からの計54件の提案を分類・整理

随時updateの予定

Ⅰ 医療・研究体制

・平時、緊急時の基礎、臨床、疫学研究の体制

【基礎研究の体制】承認システム、ファンド、検査体制：基礎生物学委員会　統合生物学委員会合同　生物物理学　**組換DNA実験規制、ワクチン開発、検査薬、BSL4：**基礎生物学委員会　統合生物学委員会・農学委員会・基礎医学委員会・臨床医学委員会合同　総合微生物科学　化学委員会

【臨床研究の体制】緊急時の臨床試験など実施体制・インフラ：臨床医学委員会　臨床研究　歯学委員会　**臨床につながる基礎研究、ワクチン開発、人材：**薬学委員会　医療系薬学　**研究の基礎体力低下、緊急時の司令塔：**大規模感染症・予防制圧検討

【疫学研究の体制】医療情報基盤、倫理的側面、個人情報保護：健康・生活科学委員会　パブリックヘルス科学　看護学　薬学委員会　医療系薬学

・公衆衛生・リスクコミュニケーション

公衆衛生・社会医学人材育成、緊急時動員体制：健康・生活科学委員会　パブリックヘルス科学　**教育、ワクチンリテラシー：**基礎医学委員会　病原体学　**生活者リテラシー：**健康・生活科学委員会　家政学委員会　**生活習慣病予防教育・指導：**健康・生活科学委員会　生活習慣病対策　**コロナ対策へのメンタルへの影響：**心理学・教育学委員会　心の研究将来構想　**医療用麻薬、依存症：**基礎医学委員会・臨床医学委員会　アディクション　**情報の受取と状況判断・意思決定＊コロナ対象ではない：**心理学・教育学委員会　心の総合基礎

・デジタル医療（格差、地域差、個人情報）

緊急時の保健医療情報　医療ビッグデータ　行政のデータベース活用　多くの分科会が関連（未整理）

・ケア（健康・メンタルヘルス　介護予防）

高齢者フレイル、介護予防、ヘルスリテラシー：臨床医学委員会　老化　**フレイル予防・対策、感染症対策：**健康・生活科学委員会　高齢者の健康　**ヘルスケアシステム、ヘルスリテラシー：**健康・生活科学委員会　看護学　ケアサイエンス　社会学委員会　社会福祉学　**DX、薬剤師職能変化、医療制度：**薬学委員会　地域共生社会における薬剤師職能　**メンタルヘルス：**臨床医学委員会　脳とこころ　**生物時計、生活リズム：**時間生物学　**ケア支援が滞らない仕組み：**地域研究委員会・地域研究基盤強化　**コロナウィルスの可視化技術：**総合工学委員会・総合工学企画

随時updateの予定

Ⅱ 社会変革

・格差（経済、情報、健康、ジェンダー）

社会学委員会・新しい社会的課題の解決に関する総合的検討　社会福祉学　社会統計調査アーカイヴ　災害・復興知の再審と社会的モニタリングの方法検討　社会理論　ジェンダー研究　法学委員会・セーフティネットと法　経済学委員会・持続的発展のための制度設計　経営学委員会・新型コロナ感染症による経営実践・経営学・経営学教育への影響　包摂的社会政策に関する多角的検討　哲学委員会・哲学・倫理・宗教教育　史学委員会他合同・アジア研究・対アジア関係　情報学委員会・環境知能　地域研究委員会・文化人類学　地球惑星科学委員会　IGU　心理学・教育学委員会（排除・包摂と教育、高大接続を考える、乳幼児発達保育）

・社会システム（福祉、医療、防災、環境、建物、まちづくり）

社会学委員会・新しい社会的課題の解決に関する総合的検討　社会福祉学　社会統計調査アーカイヴ　災害・復興知の再審と社会的モニタリングの方法検討　社会理論　ジェンダー研究　包摂的社会政策に関する多角的検討（経済学委員会合同）　地域研究委員会・地域学　土木工学・建築委員会・感染症拡大に学ぶ建築・地域都市の在り方　臨床医学委員会　出生・発達　史学委員会　政治学委員会　国際政治学　経済学委員会・持続的発展のための制度設計　情報学委員会・環境知能　地球惑星科学委員会　IGU　心理学・教育学委員会（排除・包摂と教育、高大接続を考える、乳幼児発達保育）健康・生活科学委員会　看護学

・教育のデジタル化（含　誘発される諸問題）

社会学委員会・社会福祉学　社会統計調査アーカイヴ　社会理論　災害・復興知の再審と社会的モニタリングの方法検討　歯学委員会

・コミュニケーション・孤立

社会学委員会・社会福祉学　社会統計調査アーカイヴ　災害・復興知の再審と社会的モニタリングの方法検討　社会学委員会・経済学委員会合同・包摂的社会政策に関する多角的検討　心理学・教育学委員会・排除・包摂と教育高大接続を考える　乳幼児発達保育　数理科学委員会・数学　災害・復興知の再審と社会的モニタリングの方法検討

環境・One heaith

One health,食料：食料科学委員会　獣医学　畜産学　**土地・景観、国土の経営・管理、グリーンリカバリー：**環境学委員会・統合生物学委員会合同　自然環境 **Human Dimension ：**地域研究委員会・環境学委員会　地球惑星科学委員会合同　地球環境変化人間的側面　**生物多様性保全、ワンヘルス：**統合生物学委員会・基礎生物学委員会合同　ワイルドライフサイエンス　**陸域科学：**環境学委員会　地球惑星科学委員会合同　FE/WCRP合同　GLP小委員会　**地球環境、防災：**地球惑星科学委員会　地球・人間圏　災害・復興知の再審と社会的モニタリングの方法検討　**パンデミック時のプラスチックの課題　リスクの教育：**環境学委員会・健康・生活科学委員会合同　環境リスク　**感染症サーベイランス、One health、国際ネットワーク、S20 など：**大規模感染症予防・制圧体制検討　**国際比較：**地球惑星科学委員会　IGU

知の融合（学術のあり方）

その他

パンデミックと公教育：文化の邂逅と言語、**パンデミックと人文・社会科学研究：**言語・文学委員会　**コロナ禍におけるトリアージの問題：**いのちと心を考える　**パンデミックに対する科学者組織の歴史的対応：**科学・技術の歴史的理論的社会的検討　**コロナ後の社会調査：**Ｗｅｂ調査の課題に関する検討　**将来のパンデミック発生に向けた医療および基礎科学分野における対応体制の構築：**化学委員会・物理学委員会合同　結晶学　**危機的感染症・大規模感染症流行への備えと科学の役割：**第二部大規模感染症予防・制圧体制検討

資料４

《アンケート調査結果》

Ⅰ　実施期間：　2023 年 5 月 2 日～6 月 5 日（第一次締め切り　5 月 22 日）

回収率：　34／45　＝75.6%

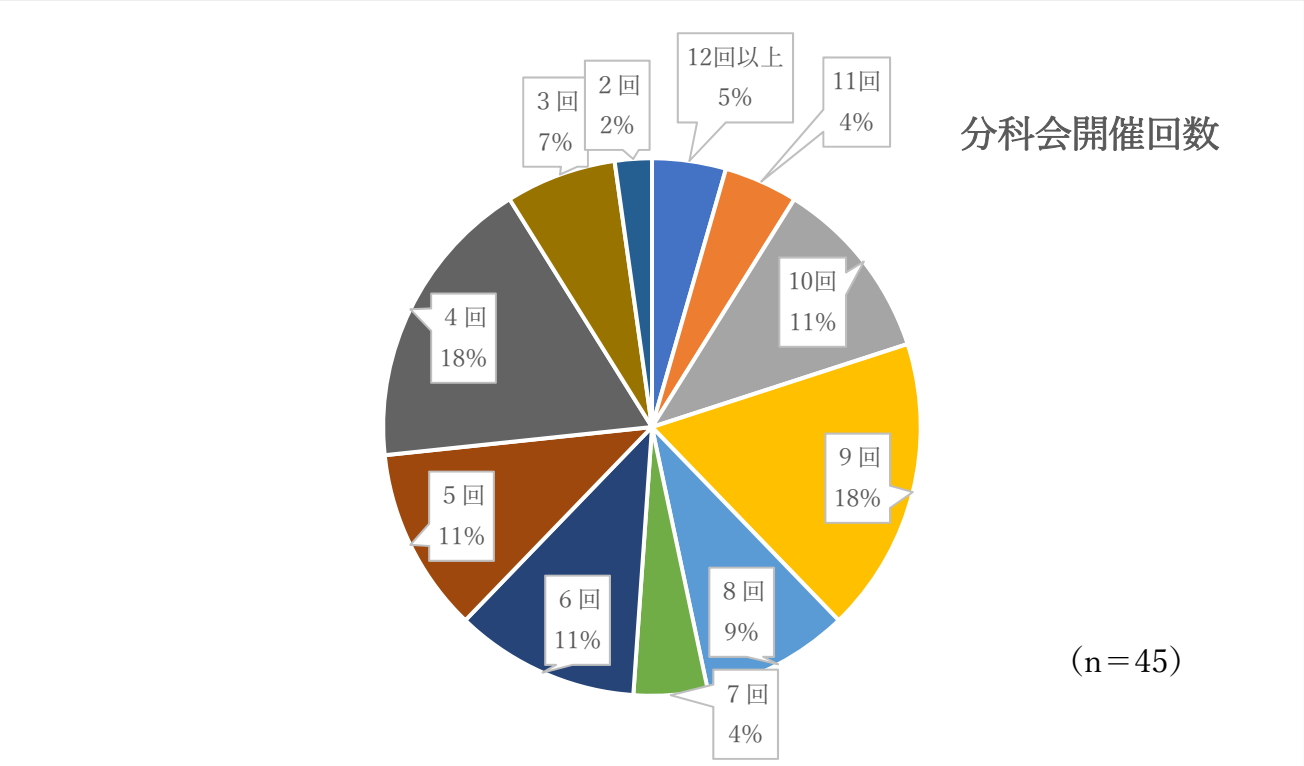
未提出分科会数：　11 分科会

アンケート項目：

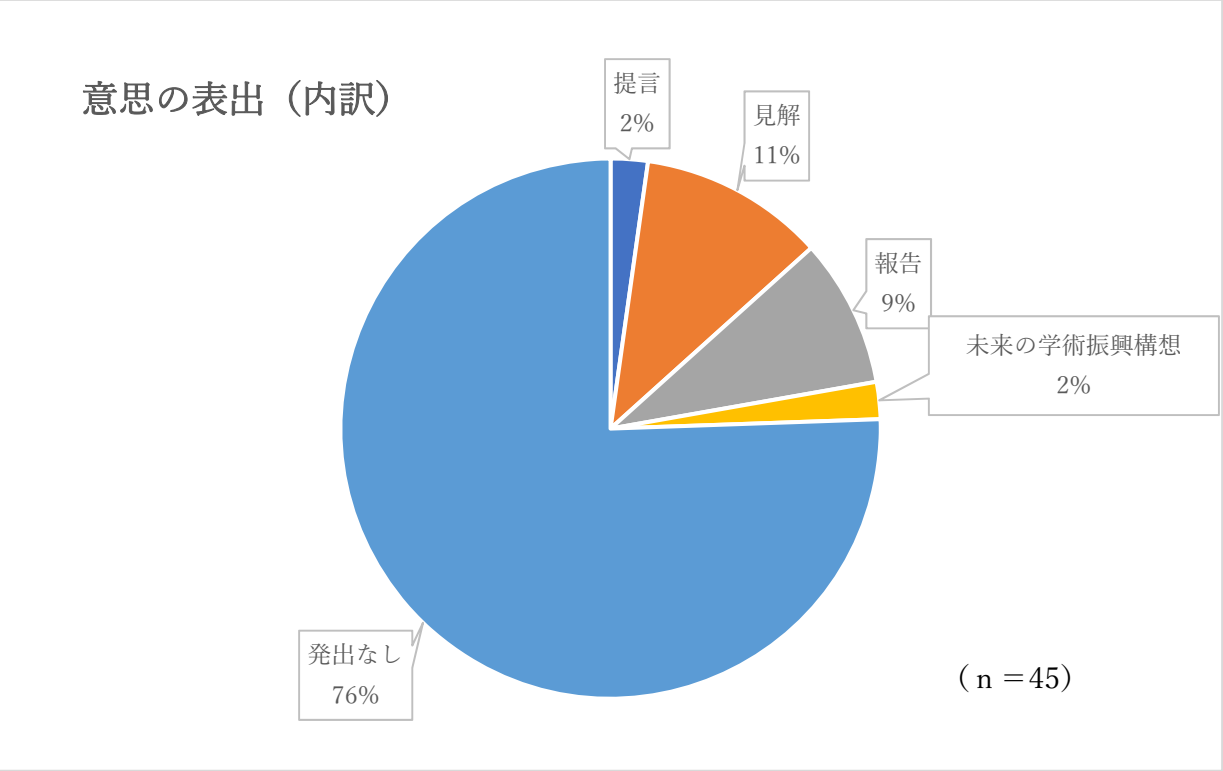
1.　分科会または分野別委員会名　　2.委員長名　　3.記入者名
4-a　第 25 期のパンデミックの課題に関する活動状況　分科会開催回数 〇意思の表出　〇公開シンポジウム　学術フォーラム等　〇記録の発出
4-b.　第 26 期に引き継ぐべき事項（あればお書きください）
5　パンデミックの連絡会議を通じて得られた成果等（例：見解を執筆するに当り、連絡会議から他の分科会へ意見を求めたなど）
6.　第 26 期にパンデミックの連絡会議は必要か、理由とともに記載してください。
7.　連絡会議に期待していたこと（他の連絡会議も含めて）
8.　第 26 期に必要と思われる連絡会議のテーマ、形態などへの提案があれば記載してください。

Ⅱ．アンケート結果の整理・分類

設問４-a　《分科会開催回数》



〇意思の表出について



「意思の表出」の内訳

提言（1分科会）

・「新型コロナウイルス感染症のパンデミックをめぐる資料、記録、記憶の保全と継承のために」
　歴史資料の保存・管理と公開に関する分科会
　意見協力：パブリックヘルス科学分科会、第二部大規模感染症予防・制圧体制検討分科会

見解（5分科会）

・「高リスク感染症流行予防対策を進める必要がある」
　第二部大規模感染症予防・制圧体制検討分科会
・「コロナ禍で顕在化した危機・リスクと社会保障・社会福祉～誰一人取り残さない制度・支援への変革～」
　社会福祉学分科会
　意見協力：セーフティネットと法分科会
・「ウィズコロナを見据えたレジリエントな、かつ安心感ある地域づくりと医療ケア体制の再構築」
　老化分科会
・「雇用・就業と生活保障のセーフティネットの再構築に向けて」
　セーフティネットと法分科会
・「コロナ禍を踏まえた新たな国土形成計画の実施に向けて」

人文・経済地理学分科会

報告（4分科会）

・「コロナ禍における口腔に関連した諸問題とその対応」

歯学委員会

共同発出：臨床系歯学分科会、病態系歯学分科会、基礎系歯学分科会

・「感染症パンデミックに対するわが国の平時・緊急時の臨床・疫学・基礎研究の現状と課題」

総合微生物科学分科会

共同発出：臨床研究分科会、パブリックヘルス科学分科会、（平時および緊急時の臨床、疫学、基礎研究の体制ワーキンググループ）

・「With/after コロナ時代の地元創成看護学の実装」

看護学分科会

・「深化する人口縮小社会の諸課題－コロナ・パンデミックを超えて」

人口縮小社会における問題解決のための検討委員会

「意思の表出」以外の発出等

未来の学術振興構想（1分科会）

・「相互支援による地域共生社会の成熟・深化に向けたケアサイエンス研究ネットワーク拠点」

少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会

意見協力：看護学分科会

記録の発出について　（3分科会）

・「感染症パンデミック対応に必要な人材養成及び学術活動などにかんする考察」

第二部大規模感染症予防・制圧体制検討分科会

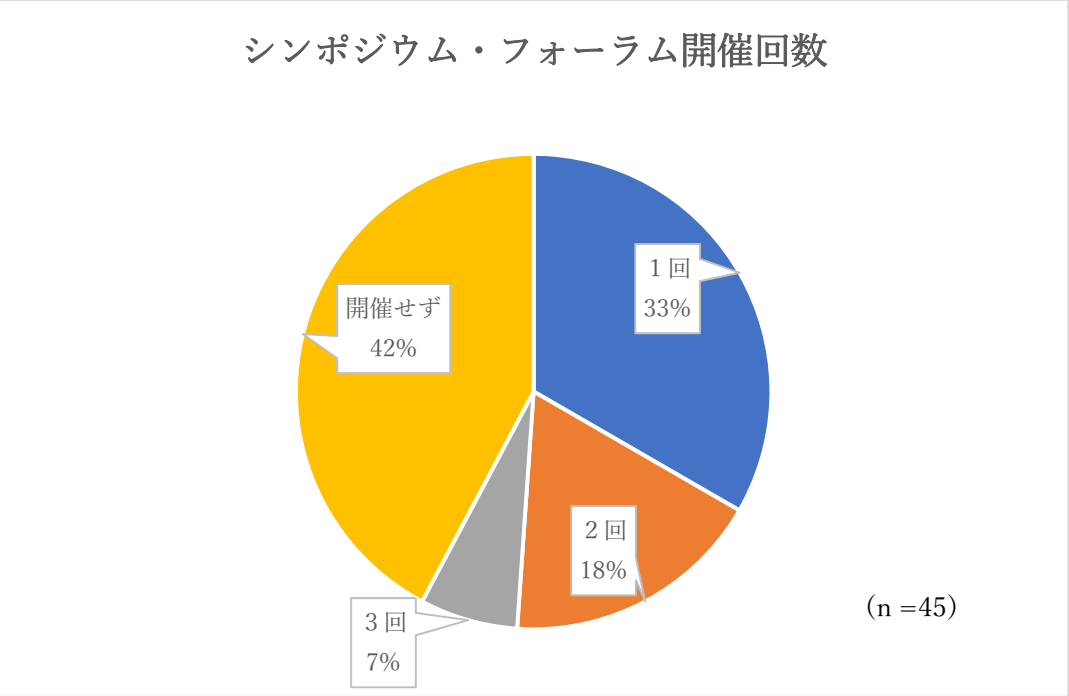
・「新型コロナウイルス感染症パンデミックの経営実践・経営学・経営学教育への影響」

新型コロナ感染症による経営実践・経営学・経営学教育への影響を検討する分科会

・「Well-being な未来社会を実現するための生存情報学」

環境知能分科会

〇公開シンポジウム、学術フォーラム



《公開シンポジウム》　時系列順

《令和２年度　2020 年》３件

・「コロナ時代におけるフィールドワーク教育をめぐって」Ｒ２年９月 19 日

主催：文化人類学分科会

共催：自然人類学分科会、地域研究基盤強化分科会

参加者 266（オンライン）

・「With コロナの時代に考える人間の「ちがい」と差別～人類学からの提言～」R2 年 10 月 11 日

主催：文化人類学分科会、地域研究委員会、多文化共生分科会、基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同自然人類学分科会　　（オンライン）

・「現代社会とアディクション」R3 年３月 28 日

主催：日本学術会議基礎医学委員会・臨床医学委員会合同アディクション分科会、基礎医学委員会神経科学分科会、臨床医学委員会脳とこころ分科会　（オンライン）

《令和３年度》15 件

・「くすりのエキスパートが語る“よくわかる新型コロナウイルスワクチン”」Ｒ３年４月 24 日

主催：医療系薬学分科会、日本薬学会

参加者：1542（オンライン）

・「With／After コロナ時代におけるケアの課題と新たな取り組み」Ｒ３年５月 22 日

主催：健康・生活科学委員会・臨床医学委員会合同少子高齢社会におけるケアサイエンス分

科会、臨床医学委員会老化分科会、健康・生活科学委員会看護学分科会、社会学委員会社会福祉学分科会

共催：日本老年学会、日本老年医学会、国立長寿医療研究センター、日本看護系学会協議会、日本社会福祉系学会連合、日本看護科学学会、日本精神保健看護学会、日本老年看護学会

参加者：367（オンライン／オンデマンド分は不明）

・「脳とこころからみた With/Post コロナ時代のニューノーマルの課題と展望１
コロナ禍とメンタルヘルス　教育、保健・医療」R３年６月 20 日

主催：臨床医学委員会脳とこころ分科会、心理学・教育学委員会脳と意識分科会、健康・医療と心理学分科会、大規模感染症予防・制圧体制検討分科会、基礎医学委員会神経科学分科会、基礎医学委員会・臨床医学委員会合同アディクション分科会、健康・生活科学委員会臨床医学委員会合同少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会、情報学委員会

共催：日本生命科学アカデミー、日本精神神経学会、日本神経学会、新学術領域「マルチスケール脳」（オンライン）

・「脳とこころからみた With/Post コロナ時代のニューノーマルの課題と展望２　コロナ禍における脳科学と人工知能」　R３年６月 27 日

主催：臨床医学委員会脳とこころ分科会、心理学・教育学委員会脳と意識分科会、健康・医療と心理学分科会、大規模感染症予防・制圧体制検討分科会、基礎医学委員会神経科学分科会、基礎医学委員会・臨床医学委員会合同アディクション分科会、健康・生活科学委員会臨床医学委員会合同少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会、情報学委員会

共催：日本生命科学アカデミー、日本精神神経学会、日本神経学会、新学術領域「マルチスケール脳」（オンライン）

・「コロナ禍における社会福祉の課題と近未来への展望」R３年６月 27 日

主催：社会福祉学分科会

共催：日本社会福祉系学会連合

参加者：748（オンライン）

・「新型コロナウイルス感染症対策の現状と今後-歯科からの発信-」R３年６月 29 日

主催：歯学委員会　臨床系歯学分科会

共催：一般社団法人日本歯学系学会協議会

参加者：250（オンライン）

・「新型コロナワクチンを正しく知る」R３年７月 17 日

主催：日本学術会議第二部、日本医学会連合、日本薬学会　　参加者：863（オンライン）

・「生存情報学-人類が生き延びるために進化する情報学のあるべき姿とは？-」R３年７月 21 日

主催：　環境知能分科会

共催：　日本工学アカデミー、情報処理学会

参加者 153　（オンライン）

・「ポストコロナ社会を見据えた睡眠･生活リズムのあり方～コロナ自粛から学ぶ～」

R３年８月 28 日

主催：日本学術会議基礎生物学委員会　・基礎医学委員会・臨床医学委員会・心理学・教育学委員会合同 生物リズム分科会

共催：日本時間生物学会

参加者：196（オンライン）

・緊急フォーラム「新型コロナウイルス感染症の災害級流行急拡大への対応」R3 年９月 11 日

主催：日本学術会議第二部、医学会連合　　（オンライン）

・「コロナ禍における社会の分断：ジェンダー格差に注目して」　R３年９月 19 日

主催：日本学術会議社会学委員会ジェンダー研究分科会、日本学術会議経済学委員会、日本学術会議政治学委員会、社会学委員会・経済学委員会合同包摂的社会政策に関する多角的検討分科会　（オンライン）

・「With・After コロナ時代の看護とデジタルトランスフォーメーション」R３年９月 25 日

主催：日本学術会議健康・生活科学委員会看護学分科会、健康・生活科学委員会・臨床医学委員会合同少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会

共催：一般社団法人 日本看護系学会協議会　　（オンライン）

・「海空宇宙の COVID-19 対応と今後のパンデミック対応に向けて」R３年９月 22 日

主催：日本学術会議 総合工学委員会・機械工学委員会合同 フロンティア人工物分科会

共催：一般財団法人運輸総合研究所、東京大学未来ビジョン研究センター

参加者：513（オンライン）

・「地域共生社会における薬剤師像を発信する」R３年 11 月３日

主催：日本学術会議、日本薬学会

参加者：538（オンライン）

・「With/After コロナ時代におけるケアの課題と新たな取り組み―子育てをしながら働き，働きながら暮らすための地域共生社会」　R３年 12 月 11 日

主催：健康・生活科学委員会・臨床医学委員会合同少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会、健康・生活科学委員会看護学分科会、経済学委員会ワークライフバランス研究分科会、若手アカデミー

共催：一般社団法人日本看護系学会協議会、一般社団法人日本助産学会、公益社団法人日本看護科学学会

参加者：250（オンライン 150、オンデマンド 100）

《令和４年度》11 件

・「口腔に関連した新型コロナ感染症の諸問題」R４年４月 23 日

主催：歯学委員会、病態系歯学分科会、臨床系歯学分科会、基礎系歯学分科会

共催：日本口腔科学会

参加者：100（ハイブリッド）

・「孤独・孤立と「つながり」の再生」R 4 年 4 月 23 日

主催：包摂的社会政策に関する多角的検討分科会、社会的包摂分科会、社会福祉学分科会

後援：社会政策学会・一般社団法人日本社会福祉学会・福祉社会学会・日本労働社会学会、日本社会福祉系学会連合・ジェンダー法学会・女性労働問題研究会、日本居住福祉学会・日本地域福祉学会．労務理論学会

参加者：773（オンライン 392 、オンデマンド 381）

・「ポストコロナ時代に求められる看護系人材」R 4 年 5 月 22 日

主催：日本学術会議健康・生活科学委員会、健康・生活科学委員会看護学分科会

共催：日本看護系学会協議会 （オンライン）

・「高齢者の健康・生活の視点から新型コロナ感染症対策に求められる老年学の役割と発揮」

R4 年 7 月 30 日

主催： 老化分科会

共催：高齢者の健康分科会　　参加者：約 400（オンライン）

・「コロナ・パンデミックと格差・分断・貧困　現状と今後」R4 年 11 月 13 日

主催：社会学委員会社会理論分科会

共催：日本社会学会　（オンライン）

・「コロナ禍を踏まえた新たな国土形成計画の課題」R 4 年 12 月 23 日

主催：日本学術会議地域研究委員会人文・経済地理学分科会

参加者：119（オンライン）

・「薬剤師のプロフェッショナリズムを考える」R 5 年 1 月 22 日

主催：日本学術会議、日本薬学会、日本医療薬学会

参加者：871（オンライン）

・「感染症拡大に学ぶ建築・地域・都市のあり方ー機能分化社会から機能混在社会へ」

R5 年 1 月 22 日

主催：日本学術会議 土木工学・建築学分科会　感染症拡大に学ぶ建築・地域・都市のあり方分科会

共催：日本建築学会、土木学会、日本都市計画学会、地理情報システム学会、日本計画行政学会

参加者：152（オンライン）

・「地方におけるデジタル・ガバナンス」R 5 年 3 月 4 日

主催：日本学術会議政治学委員会政治過程分科会、

共催：慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科付属 SDM 研究所　パブ

リックシステム・ラボ

参加者：80（オンライン）

・「With/After コロナ時代におけるケアの課題と新たな取り組み―医療・ケア、倫理、政策の捉え直しと提案」R５年３月 18 日

主催：健康・生活科学委員会・臨床医学委員会合同少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会、臨床医学委員会老化分科会、健康・生活科学委員会看護学分科会

共催：一般社団法人日本看護系学会協議会、公益社団法人日本看護科学学会

参加者：297（オンライン 182、オンデマンド 115）

・「コロナ禍で顕在化した危機・リスクと社会保障・社会福祉～誰一人取り残さない制度・支援への変革～」R５年３月 26 日

主催：社会福祉学分科会

共催：日本社会福祉系学会連合、日本ソーシャルワーク教育学校連盟

参加者：440（オンライン 273、オンデマンド 167）

《令和５年度》６件

・「コロナ感染症をめぐる記録と記憶ー何を、誰が、どう残すかー」R5 年６月 24 日

主催：史学委員会、史学委員会歴史資料の保存・管理と公開に関する分科会、日本歴史学協会

共催：日本アーカイブズ学会、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会

・「ウィズ・ポストコロナ時代における老年学の役割と発揮：新たなステージに向けて」R5 年７月 29 日

主催：日本学術会議健康・生活科学委員会高齢者の健康分科会、臨床医学委員会老化分科会

・「社会的包摂ビジョン：孤独・孤立を越える」R５年８月５日

主催：包摂的社会政策に関する多角的検討分科会

後援：社会政策学会、一般社団法人日本社会福祉学会、福祉社会学会、日本居住福祉学会、日本社会福祉系学会連合、日本労働社会学会、女性労働問題研究会、労務理論学会、日本地域福祉学会、ジェンダー法学会、社会政策関連学会協議会　（オンライン）

・「「IT 社会と法」における光と影－利用者・データ・アクセスに焦点を当てて」R5 年９月１日

主催：日本学術会議法学委員会 IT 社会と法分科会

共催：消費者庁、成蹊大学 Society 5.0 研究所、同志社大学デジタル法制研究センター

・「パンデミックと経営　－危機にどう備えるか」R５年９月 18 日

主催：新型コロナ感染症による経営実践・経営学・経営学教育への影響を検討する分科会

共催：経営関連学会協議会

・「デジタルデータ・社会調査データの公共的な利活用に向けて」R５年９月 24 日

主催：社会統計調査アーカイヴ分科会

共催：Web 調査の課題に関する検討分科会　（オンライン）

《学術フォーラム》

《令和２年度》２件

・「コロナとの共生の時代における分析化学の果たす役割」R２年 11 月 11 日

主催：日本学術会議（分析化学分科会）

参加者 120（対面及びオンライン）

・「新型コロナウイルス感染症コントロールに向けての学術の取り組み」R２年 11 月 28 日

主催：日本学術会議

共催：日本医学会連合　　（オンライン）

《令和３年度》６件

・コロナ禍を共に生きる[新型コロナウイルス感染症の最前線-what is known and unknown # １]「新型コロナウイルスワクチンと感染メカニズム」R3 年５月８日

主催：日本学術会議、日本医学会連合　　（オンライン）

・コロナ禍を共に生きる[新型コロナウイルス感染症の最前線-what is known and unknown # 2]「新型コロナウイルス感染症の臨床的課題、対策と今後の方向性：臨床の現場を知り、何をすべきか一緒に考えましょう。」R3 年９月 18 日

主催：日本学術会議、日本医学会連合　（オンライン）

・コロナ禍を共に生きる＃３「パンデミックに世界はどう立ち向かうのか～国際連携の必然性と可能性～」R3 年 10 月 23 日

主催：日本学術会議

共催：パンデミックと社会に関する連絡会議　　（オンライン）

・コロナ禍を共に生きる０４[新型コロナウイルス感染症の最前線-what is known and unknown # ３]「新型コロナウイルス感染症の予防と治療　Up-to-date　そして変異株への対応」

R4 年２月５日

主催：日本学術会議、日本薬学会、日本医学会連合　　（オンライン）最大視聴者 917 名

・コロナ禍を共に生きる＃５　感染症をめぐる国際政治のジレンマ　科学的なアジェンダと政治的なアジェンダの交錯」R4 年２月６日

主催：日本学術会議

・コロナ禍を共に生きる＃６ウィズ／ポストコロナ時代の民主主義を考える：「誰も取り残されない社会を目指して」R4 年３月 15 日

主催：日本学術会議（社会理論分科会）　　（オンライン）

《令和４年度》２件

・「コロナ禍を共に生きる#7　新型コロナウイルス感染症のレジストリ研究の現状と今後の方向性医療情報の収集と活用による対策について」R4 年５月 28 日

主催：日本学術会議、日本医学会連合　　（オンライン）　　最大視聴者 105 名

・コロナ禍を共に生きる#8「コロナパンデミックが顕在化させた「働くこと」の諸課題は人口問題にどう影響するか？」R4 年 9 月 2 日

主催：人口縮小社会における課題解決のための検討委員会

参加者：150（オンライン）

設問５：パンデミックの連絡会議を通じて得られた成果等

・【臨床研究分科会】

パンデミックの連絡会議「平時、緊急時の臨床、疫学、基礎研究の体制」のワーキンググループに３名の委員が参画した。ワーキンググループは、SARS-CoV-2 に関連した臨床研究に中心となって関わった研究者１名にヒヤリングを行った。３名の委員を通じてワーキンググループでの審議について双方向での情報交換が行えた。

・【生物物理学分科会】

新型コロナウイルス感染症に関する第２部でのアンケートに対して、意見を提出した。また、パンデミックの連絡会議「平時、緊急時の臨床、疫学、基礎研究の体制」のワーキンググループに１名の委員が参加した。

・【少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会分科会】

公開シンポジウムを企画検討する際、連絡会議に確認を求めた。

・【大規模感染症予防・制圧体制検討分科会】

連絡会議のメンバーで１名の助言を基に分科会で見解に「患者の隔離、住民などの移動制限などに関する情報提供を含むコミュニケーション体制の構築」に関する記述を追加した。

・【社会学委員会・社会福祉学分科会】

サブテーマごとに集まり、あるいはアンケート調査により各分科会の動向を把握できた。ただし、実際には連絡会議を通さず、対応委員会からの助言で同様の取組みをしている分科会へ意見を求める形となった。

・【包摂的社会政策に関する多角的検討分科会社会的包摂分科会】

孤独・孤立は現代社会における恒常的課題だが，連絡会議を通じてパンデミックという顕在化した社会課題を通じて議論を深めることができた。

・【老化分科会】

見解を執筆するに当り、連絡会議からの発信を参考にした。

・【感染症拡大に学ぶ建築・地域・都市のあり方分科会】

(1)2021 年夏季に感染症拡大期(2020 年 4 月～2021 年 4 月)の働き方、学び方、住まい方、情報インフラの状況について世界 33 か国 84 名にアンケートを実施し、各国の状況と将来展望についての記録を取りまとめた。

(2)感染症蔓延が落ち着きを見せ始めた 2022 年 10 月に建設業界(設計事務所。建設会社、官庁)152 名にアンケートを実施し、ポストコロナの働き方やテレワークのあり方、情報インフラの

あり方(感染症・防災情報の共有化含む)についての意見集約を行った。

(3)2023 年 1 月の公開シンポジウム後にポストコロナの機能分化社会のあり方についてアンケートを実施し、参加者より 43 件の意見・コメントを得た。

・【史学委員会　歴史資料の保存・管理と公開に関する分科会】

本分科会による意志の発出を準備する際に連絡会議にお願いして、日本学術会議第二部健康・生活科学委員会・基礎医学委員会合同パブリックヘルス科学分科会、日本学術会議第 二部大規模感染症予防・制圧体制検討分科会に参加している専門家からコメントを得て、提言原案をブラッシュアップすることができた。

・【史学委員会　歴史認識・歴史教育に関する分科会】

本分科会で準備中の見解（「変容する現代世界と歴史認識・歴史教育の課題」）の執筆、および関連する公開シンポジウムの企画にあたり、連絡会議での議論、同会議からの発信を参考にした。

・【史学委員会　アジア研究・対アジア関係に関する分科会】

パンデミックの下での変容とそこにおける課題について、本分科会における特殊な事情も理解することができた。特に、アジア諸国の一部にパンデミックの下で学術に対する管理統制を強化した国、地域があり、それが特に大きな課題になっていることがわかった。他方で、パンデミックの下でデジタル化が一層進み、それに伴う利便性とともに、リスク、課題が増大していることなどは他の分科会と論点を共有できる部分だと感じられた。

・【人口縮小社会の課題解決に関する検討委員会】

学術フォーラムの登壇者についてアドバイスを得た。

・【IGU 分科会】

パンデミックが提起する広範な問題の所在について学ぶ機会が多かった。今後も動向を注視し、地理学的見地からの検討を続ける必要がある。

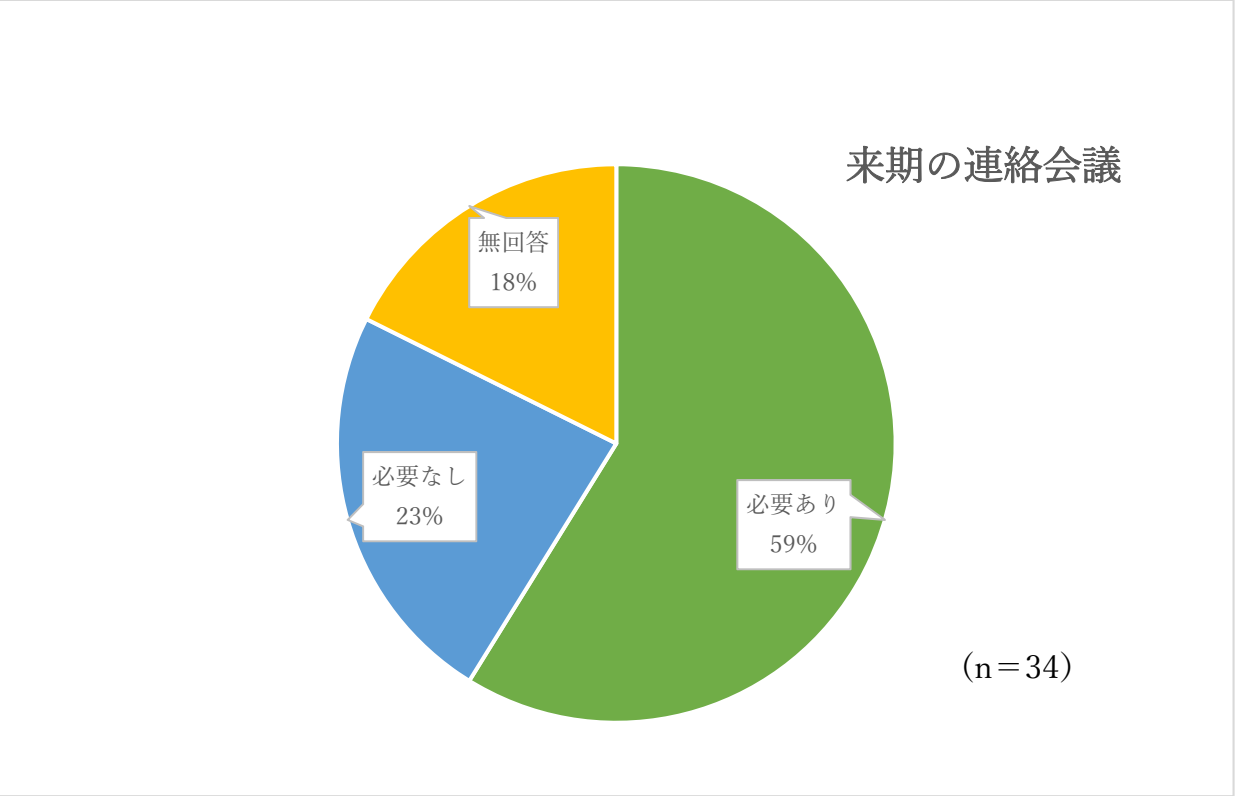
・【人文・経済地理学分科会】

今回、時間的に余裕がなかったこともあり、直接連絡会議を通じて、他の分科会等に意見を求めることができなかったが、見解の文章のなかで、日本学術会議の新型コロナウイルス感染症に対する取組として、SSH7(Social Science and Humanities7) 共同声明 (2021 年 11 月 16 日)「COVID-19 からの回復―信頼性・透明性のあるデータ収集」、「COVID-19 からの回復―格差と結束」を引用させていただいた。

・【歯学委員会】

本パンデミックが引き起こす様々な問題とそれに対する考え、対応の情報を共有できた。

設問６： 第 26 期に連絡会議は必要か



《必要あり》の理由

・25 期は、それぞれの WG 内での議論にとどまった印象が強く、26 期では WG 間での情報・意見交換を行うべきと考える。

・パンデミックから得られた知見を科学的に整理し、今後の対応に生かすための方法などの構築が必要。

・今回のパンデミックの経験から得たものを、しっかりと後世に残す必要があると考えるから。

・今回のパンデミックの経験からわが国の対応体制に多くの不備が見つかった。

・感染症はこれまで常に「喉元過ぎれば熱さを忘れる」を繰り返してきたので、継続がよろしいと思う。

・パンデミックを通してあぶり出されたことの吟味は、今でないとできないと考えるため。

・今後、新型コロナウイルス感染症の流行が仮に終息した場合も、対策の検証や後遺症などに関して、国際学術会議などでも検討が行われると思われ、そのような活動に対応する受け皿が日本学術会議の内部に必要と思われる。

・今後も、急性感染症・慢性感染症の対策は重要な社会問題となる可能性があり、日本学術会議の一部・二部・三部の専門性を生かし、部を横断する形での議論を行う分科会（あるいは委員会）が必要と思われる。

・パンデミックにかかわる国内外の状況につき、引き続き、情報共有をお願いできればありがたい。

また、異領域・異分野における学術的な蓄積について知る機会としても貴重だと思われる。
・テーマ／課題の大きさからして引き続き検討すべきである。
・5 類以降前の諸課題の検討と克服が必ずしも十分ではないこと、いわば潜在化したパンデミックにどのように対応するかは、恒常的に考察を深め具体的な施策につなげる必要があること、パンデミックが格差社会を拡大したとするとその是正は基礎に立ち返り継続的に検討すべき必要性があることなど。
・長期的に教訓を残すべき。
・コロナ禍における自粛により増加したフレイル高齢者に対する継続的な提言が必要なため。
・新型コロナウイルス感染症は、WHO から緊急事態終了が宣言されたが、今後の同様なパンデミックがいつ起こるかわからない。そのような事態に即応するためには、パンデミック連絡会議で議論した内容は検証し、26 期以降も連絡会議を設置し継続的な検討が必要であると思われる。
・地域包括的に連絡会議することで、学際的に相互に分科会が交流することが期待される。
・パブリックエンゲージメントと行動変容の促進のためにデータ可視化の有用性を議論する必要がある。データ可視化は、一般の人々に対して情報を分かりやすく伝える手段としても役立つ。視覚的なデータ表現は、広範なパブリックエンゲージメントを促進し、人々の意識と行動を変容させることに寄与する。人々が感染リスクや対策の重要性を理解し、適切な行動を取ることが重要。
・学術会議として、2020-2022 年のパンデミックの記録をきちんと整理し、残しておくべき。
・Covid-19 パンデミックが急速に忘却されつつあるが、パンデミックと社会との関わりについて、学術全体で考えていく必要があると思う。
・提起された問題について長期的に注視する必要がある。
・情報提供・交換のため。
・まだパンデミックによってどのように学術の環境が変容したのかということについて明確でない部分があるため。

《必要なし》の理由

・連絡会議の位置づけがよく理解できなかった。課題別委員会でいいのではないかと思う。課題別委員会が、各分科会に幅広く意見聴取すればと思う。
・パンデミック連絡会議で議論された課題は継続的に検証することが必要ではあるが、既に WHO から緊急事態終了宣言が出されており、26 期に連絡会議を設置する必要性は低いと思われる。
・単なる情報共有というよりは、見解や提言といった意思の表出のできる組織のもとで、あと 1 期は継続することが有意義だと思われる。
・5 月 8 日をもって新型コロナウィルスの感染法上の位置付けが 5 類にシフトしたため。
・WHO が「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を年内に解除する見込みのため。
・パンデミック状況から通常の社会へと移行が進んでいるため。
・パンデミックについてはさまざまな研究調査活動が行われていて、屋上屋を重ねるようなものだから。むしろ、分野横断型の分科会を設置して腰を落ち着けて問題に取り組むのがよいのではな

いか。

・SCJ 全体の在り方自身が問われている。

設問７《連絡会議に期待していたこと》

・連絡会議として異分野との意見交換を期待していた。
・重要なテーマに関する委員会や分科会の枠を超えた情報交換、意見交換の場の提供と集約された意見の社会への発出。
・頻繁に、状況の報告や科学的知見からの対応や科学的な成果をまとめてみんなで共有することができるとさらに良かったかとも考えている。
・複数委員会、分科会間の連絡、調整。
・提言や見解の作成では日本学術会議の一部・二部・三部の専門性を生かすことが求められているため、委員会・分科会の設置を準備する段階で、委員会・分科会委員の構成にかんして助言を与え、また、委員の勧誘・招聘に協力してもらえる組織があることが望ましいと考える。
・当初は、連絡会議が意思表出の母体となると考えていたが、途中からそれが難しいことが判明し、連絡会議の意義や位置づけが不明瞭になった。また、どのような情報をどのように共有すれば有効であるか判然としない部分があった。
・パンデミックにかかわる国内外の情報・学術成果の共有を期待していたし、今も期待している。
・当分科会では、震災被災者のプレゼンス（社会における立ち位置）を明らかにする一環として、（震災被災者が）いわゆるパンデミック弱者とどう重なりあっているのか、あるいはそうでないのかの検証が重要だと考えている。したがって連絡会議の議論と成果に大いに期待している。
・分科会の特質を活かした貢献ができることを期待していたが、該当する部門との連携をとることができなかった。社会学関係はおしなべて社会変革の部分に入れられたようだが、本分科会としてはリスク・コミュニケーションの分野において貢献できると考えていた。そちらからは声がかからなかった。
・パンデミックに対するバランスのとれた提言。
・論点の共有とともに、個別分野に特有の課題について把握してほしい。

・各方面の専門家との協働作業を通じて、医療分野での DX 技術の利活用や医療提供体制の変化に伴う新規デバイス・システム開発など、地域社会や医療に貢献できる施策の創出。
・専門特化する分科会には、学際的に相互交流する各種分科会との連絡会議は必要と思われる。
・パンデミックにおける状況把握とリアルタイムな分析におけるデータ可視化への要件の例示を期待していた。
・パンデミックに関連する重要課題に関するシンポジウムなどのタイムリーな企画。
・意見の発出は連絡会議を通じて行うこととされていたので、テーマごとの関連分科会の意見交換・調整の取りまとめ機能を期待していたが、殆ど活動がなかった印象。

・日本学術会議の特徴を生かして多面的にパンデミックに取り組むこと。

・積極的な関与の呼びかけ。
・パンデミックと社会に関してグルーピングがされ、分科会が連携して、シンポジウムなどが開催されたところもあるので、期待していた活動が部分的には達成されたと思う。ただし、パンデミックの問題解決や国や自治体の施策の改善にどこまで貢献できたかというと、そこまでには及ばなかったのではないかと思う。

設問８　《第 26 期に必要と思われる連絡会議のテーマ等》

・未来のパンデミック、あるいは大規模災害を見越した体制構築。
・感染症流行および感染症の後遺症の社会的影響に関する連絡会議が必要と思われる。
・コロナ禍が提起したさまざまな課題や対応を、各分科会の発出する見解やシンポジウムの成果などを通して、学術的、学際的な観点から整理・集約する。情報共有の連絡会議というよりは、課題別委員会を設置して取り組むことも一案かと思われる。
・2023 年 5 月より 5 類に移行したこともあり、現在、直接的にパンデミックにかかわって何らかの活動をする必要はないとみている。ただし、長期的に考えると、人間どうしの会話や交流が制限されたこの 3 年間の経験が今後、子どもたちを中心とする人々の成長・発達・成熟にどのような影響を及ぼすのかについて慎重に経過観察をすべきだと考えており、これにかかわる学術的な研究もこれから蓄積されていくと思われる。そうした今後の動向によっては、他の分科会と協力しながら活動する必要が出てくるかもしれない。このことも踏まえて、上記のように、今後も様々な分野の国内外の情報について共有をお願いできれば幸いである。
・連絡会議の構成メンバーである各分科会はそれぞれ固有の課題／テーマを抱えている。したがって分科会が全体として連絡会議のメンバーになるのではなく、分科会から選出された委員(個人)がメンバーになり、連絡会議と各分科会をつなげていくのがより適切かと思う。
・今回の変更によって，提言も見解も他分野との共同が前提になってしまったので、最初からそのような組み方をしない限り、報告にとどまらざるをえないことを周知すべきだと思う。
・今後想定されるパンデミックに即応するには、連絡会議で継続的に協議し、機動力のあるシステムを構築する必要があると思われる。
・25 期の発足時に会員任命問題に遭遇した。そのために、分科会のテーマと構成員を再編成することが困難となった。会員と連携会員の任期と任命が曖昧となり、新たに分科会のテーマと構成員を再構築するために将来構想の分科会の連絡会議が必須と思われる。
・パンデミック予防の観点から、データ可視化の重要性を強く認識している。以下にテーマの例示をする。

-意思決定の根拠となるデータ駆動のアプローチ:

データ可視化は、意思決定を支援するための貴重なツールである。データから洞察を得ることにより、感染予測、リスク評価、対策の効果評価などに対する根拠となる情報を提供する。デ

ータ駆動のアプローチに基づいた意思決定は、より効果的なパンデミック予防につながる。

-情報共有と透明性の確保:

データ可視化は、関係者間での情報共有と透明性の確保に役立つ。視覚的な表現によって、関係者全員が同じ情報を共有し、意思決定や対策に対する理解を深めることができる。透明性の高い情報共有は、信頼と協力の基盤となる。

・連絡会議という形態よりも分科会の方がよいのではないか。

・検討すべき課題を整理し、優先順位をつけて総合的検討を進める必要がある。

・会議を密に開催して欲しい。

・議論とともに問題解決のための提案もなされるような場になることが望ましい。

―以上―

※分科会開催数、学術フォーラム、意思の表出についてはアンケート調査結果で収集されなかった分科会の活動も含めて集計、分析した。